

栴中軒雲石溪門入道講演

南部坂雪古別札

明倫社藏



特 51
726

南部坂雪之別れ

桃中軒雲右衛門入道溝廣

明治
45. 6. 11
内交

御江戸羅紗の長合羽、爪掛なした高足駄、二段彈金の
遊蛇の目。後に續くは大石の、懷裡刀寺西彌太夫。來
るは名代の南部坂。

淺野式部少輔殿御門前

内御門番 大石内藏助良雄 瑤泉院様御目通りな仕り度

南部坂雪の別れ

凡例

- 一、本書は武士道鼓吹者桃中軒雲右衛門入道の講演になる義士
銘々傳及び義烈百傑集中最得意の演題を選び一段一冊本と
して發刊するものなり
 - 一、本書は一言一句講演者の嚴密なる校訂を経たり
 - 一、本書中三號活字（一字上げ大字の分）は節にして四號活字
（一字下げ小字の分）は言葉なり
 - 一、節の中に「」を附したる部分は節の中に於ける言葉なり
 - 一、本書の振假名は別に文法に則らずして何人にも解し易き所
謂新聞假名によれり
- 以上

門「御通りなされ」

御門を這入るひんだり手、新たに出来た一ツの門、これより内、男禁制の札打つたり。

内「御門の内方へ物申さん」

女「誰方で御座る」

内「大石内藏助良雄、御後室様御目通りな仕り度く」

女「少時御待ち下され」

暫時待つて居るうちに御門を開いて呉れる、這入る右手が供待所。傘も合羽も寺西に渡し、玄關にかゝれば小野寺十内が妹、戸田の局が御出迎へ。

戸「これはく御城代様には能うこそ御見えて御座りまする」
内「戸田よ、久々にて罷り越したが、御後室様に御變りは御座らぬか」

戸「貴方の御出でを今日であらうか明日であろか」

内「御待受け下さるゝは忝し、案内な頼むぞ」

戸「心得ました」

戸田が案内に奥深く、通りて見れば正面に、淺黄綸子の御褥に、白の綸子の御召物、紫紋紗の十徳に、水晶念珠爪線りて、此世を思ひ切髪の、今年十九の瑤泉院内藏は見るより低頭平身。

孫「ア、良雄なるか能う見えたぞ、其方來るを待つや久しう思ふて居た」

内「何時もながら麗はしきを拜し、内藏助身に取、如何ばかりか恐悦至極に存じまする」

孫「戸田よ、久々にて見えた内藏助」

今日は幸ひ御命日、精進ながら酒一つ、みづからも相伴なせう」

内「こは、恐れ入つたる御言葉にてさふらふ」

戸田が指揮に數多女中が俄に運ぶ酒肴。これ主従の別れの盃と、口には云はね心のうち。實は今宵の一大事、

明けて御話致す心て來たのぢやが、最前より今迄見馴れぬ一人の女中、内藏助にのみ目を注げる。此奴油斷のならぬ奴、うかき大事はこりや明けられぬ。

わざと良雄、數献重ねて酔ひた態」

内「ア、何時にない頂戴仕つた。今日内藏助罷り出でしは外儀にあらず、御暇乞として罷り出でたる儀でござる」

孫「暇乞とは内藏助、何方へ參る所存なるぞ」

内「ハツ、御承知の如く、御主人御法事も最早取越で済ましたれば江戸には用のない身體。一旦、京地へ立歸り、一夜明ければ大阪表に罷り出で、武門を捨て、小間物屋を始む

るの計畫。仕入萬端調ふたれば、昨日倅奴は出立、手前は明日江戸の地を發足の心算。これが十里か二十里の所であれば、月に一度の御仕伺も致さうが、百里距れた大阪から、年に一度はチトむづかしい……………

隨分御身を大切に」こ意外の言葉にハツト驚く瑤泉院「ナ、ナ、ナント内藏助、そりや本性でお言やるか」

内「何偽言が御座らうぞ」

瑤「眞實と云ふか内藏助……………」

頼み難いは人心とはよう云ふた、御家繁盛のその頃に、江戸御屋敷にある時は、内藏は何して良雄はと、其方

の噂の出ぬ日なく、五萬三千石に過ぎた家來は大石と、來る人毎に御自慢の。田村邸にて御切腹のその折も、自や御舍弟に、何一つの御遺言もなう、片岡以て無念なるその御言葉と、御辭世書かれし短冊や、御肉貫の短刀迄、其方に記念と下されし、主公の恩義を忘れてか……………言はふ様なない人てなし、言葉交すも穢らはし、立て立て下れ、立ちませい」

御道理なる御言葉ぢや、いつそ今宵の一大事、明けて御話致さうか……………イヤくくさにあらず、今の怒の御涙、一夜明けたら嬉涙に變るであらう。

内「その御立腹では恐れ入る。然ればこれにて御暇を……………」
わざと踏躰ぎ立上り、心は後に後髪、取つて引かるゝ
氣はすれど、氣を勵ませた長廊下。戸田の局が御見送り。

戸「御城代様」

内「戸田よ」

戸「承れば貴方には、武門を捨て、町人におなり遊ばすこのこと」

内「ハ、時世であれば致し方はないわ」

戸「つかぬことを御尋ね致するやうで御座りまするが、手前

の兄の十内や、また、幸右衛門などは何處に居るか、御承知はござりませぬか」

内「小野寺父子は確か京地にある筈ぢや」

戸「都で何を致して居りまするか」

内「彼等は飴屋を始めてゐる」

戸「アノ飴賣を……………」

内「ムウ、十内がそれ器用で、三味が上手で喉が美い、幸右衛門に舞踊を仕込んで、飴買うて呉れる度毎に十内の三味で幸右衛門が舞ふ、島原、祇園の流行兒、飴が大層賣れるげな」

戸「耻を知らぬと申さうか、場所もあらうに京都で、飴賣するとは何事ぞ、若しもや御逢ひなされたら、妹戸田が言ふて寄越した、腹でも切つて何故死なぬと」

内「ムウ、腹でも切つてなぜ死なぬと……必ず云ふて聞かするぞ。それから戸田よ、餘りの御怒につい御渡しするを忘れて居つた、此の紫の服紗包、良雄京地にありし頃、歌の會などに出で、一首二首と詠んだるものもあり、京の名所の繪圖もあり、今差上げても御手には觸れまい、明日にでも相成りて、御機嫌直りしその頃に、展いて御目にかけてやう、また、御後室様見るまでは、和女も見ること罷り

叶はぬ』

戸「しかと手前が預かりました」

内「戸田よ、遠く離れて行く身體、瑤泉院様御身の上、頼むは其方より外には無いぞ」

戸「及ばぬながら私に」

内「また違ふこともあるならん、戸田よ身體は大切に」

戸「貴方様にも御身は大切」

揃へてありし履物に身を載る。背後に廻る寺西が、無言で着せる長合羽、開いて渡す遊蛇の目。やうく出てし門の外、下りかゝりし南部坂、雪に途絶えし人影

の、後振向いて主従が、耐え々々し血の涙。
あこに後室泣き倒るる、戸田の局や数多女中が勦りて、
其夜は寝に就いたれど、唯何さなう寝苦しう、身體ビ
ツシヨリ脂汗、子の刻半と云ふ頃に、不圖眼を覺まし
て見てあれば、宵に消した佛間の御燈明、誰が點せし
かバツト一度に輝いたり。未だ開かぬ堅菴、挿したげ
かりの水仙花、さも嬉しげに笑ひけり。
戸田の局も寝付かれず、上の身の上兄の身や、我身の
上を思ひ合はせてウツラくく物案じ。

『ミシリツミシリツ……』

廊下に聞ゆる足音に、合點行かじと耳立て、窺へば。ソー
ツト障子を開け、黒の行装に覆面頭巾、巻いて持て来た男
帯、入口の敷居から、向ふの用筆筒へ向けてコロ／＼コロ
コロ、疊の音のせぬやうに、帯をば蹈んでソツト来る、用
筆筒の上に乗せある内藏助から預つた服紗包、確ツミ握つ
て出やこした。女ながらも小野寺が妹、スツクリ起て後背
から、『曲者ツ、待つた』と抱き止めた。逃げんとするを、
さはさせじ、『ヤア、各々、御出合ひ候へ、曲者、曲者』と
呼ぶ聲に数多の女中、雪洞に燈火を點じバタ／＼く／＼。
取押へたる一人を、雁字絡に引括し、被りし頭巾除つ

て見りや、男ぢやないぞ、新規抱えの小間使、赤坂田町の八百屋の娘、晝間大石来た時に、此奴油断のならない奴ぢやと睨んだ眼力に違はないぞ。

戸「ヤア其方は」

女「ハイ、出来心でございますから御勘辨を」

戸「イヤ、出来心とは云はせぬぞ、外の物ならイザ知らず、内藏助殿より預かりし、服紗包にのみ目をくれたるが一ツの不思議、ソレ瑤泉院様御面前途引ッ立てよ」

引立て、来るそのうちに、夜はしらしくと明け渡る。慌て、駆け来る一人の女中。

女「申し上げます」

戸「何事であるか」

女「只今足輕寺坂吉右衛門と申する者罷出で、昨晚本所松坂町、吉良殿邸に大石良雄以下の者四十有餘夜込亂入、首尾能く御殿様御残念相續、高輪泉岳寺へ引揚げましたる、此段注進として罷出でましたるが、如何計らひませうや」

こ、聞いて喫驚瑤泉院、戸田の局と顔見合はせ、夢てはないか……

扱ては昨日参りしは、ありや他所ながらの暇乞ひ、知らぬ女の淺墓から、定めし腹が立つたであらう。足輕

たりとも苦しいない、目通り許すの御言葉あり。
少時ありて案内に連れ、中庭に通る寺阪は、しかも昨夜の仇討の姿の儘、雪にベツタリつく面形。御後室には御椽先、後に續いて戸田の局、昨日内藏殿御言葉に小野寺父子京地にありと云ふたるが、それが眞實か但し又、昨夜の仇討同志のうちに加はり居るか、それが問ひたい聞きたやこ、思ひながらに進み出て。

戸「寺坂吉右衛門とは其方なるか、瑤泉院様御目通りなるぞ、昨夜の仇討物語な致せ」

寺「ハハツ」

寺坂此折頭を上げ形を改め、「たかが下郎の分際にて、御後室様御目通り相叶ひしは、下郎奴の面目これに過ぎたるはなし、イ、デ仕らん昨夜の仇討物語。」

赤穂最後の評定のその折は、同志は五十三人あつたれど老いて死したるものもあり、行衛不明のものもあり、昨日高輪泉岳寺に最後の評定、昨夜本所尾上町、楠屋の二階に勢揃ひ、集る人数四十七、缺けしは横川勘平のみ、刻限来るを待ち受けて、同じ行装の勇ましく、打つや太鼓の山鹿流、しかも一二三流れ、十二陰陽五鼓切り返し火事よ々々と呼はりつゝ、吉良殿邸御門前、